

である。

(泉 彪之助)

〔平凡社・〒152-8001東京都目黒区碑文谷五―一六―一九、電話〇三―五七二―一―二三四、平成十年五月、四六判、二九六頁、本体二二〇〇円〕。

北条元一著

『米沢藩医史私撰』

著者は昭和二四年(一九四九)以来、郷里の山形県米沢市で耳鼻科を開業する医師である。繁忙な開業医のかたわら、長年にわたり上杉謙信以来の由緒ある米沢藩の医史を研究している。昭和十一年(一九三六)に東京慈恵会医科大学を卒業後軍医として応召し、シベリア抑留という辛酸をなめて、開業の前年に帰国した。今年八八歳という高齢にもかかわらず、筆鏢としての執筆生活をおくっている篤学の士である。

本書は一九九二年にすでに発行されている。本来ならその期に本欄で取りあげられてしかるべき著書であったのだが、なにかの行違いがあつたのであろうか、言及されることなく今日まで時がすぎてしまった。会員の著書でもあり、本書以外に米沢藩の医史をあつかった書物がない現在、放置するに忍びなく新刊とはいいたい時期ではあるがあえて取りあげた所以である。

米沢藩といえ、だれもが天保期の小児科医堀内素堂を思い浮かべるにちがいない。本書もこの素堂を傑出した医師と

して家系にもつ、藩医堀内(ほりのうち)氏代々の業績を中核にしてまとめられている。すなわち六六〇頁というこの大冊は五五章にわけられているが、医師としての初代忠哲からはじまり、六代忠亮にいたる一五〇年の蘭方医家堀内氏の歴史が、三四章・四二〇頁におよんでおり、全冊の三分の二を占めている。

堀内氏をかたる上でぜひとも取りあげなければならぬのは「堀内文書」であろう。堀内氏の後裔であり、当主にあたる堀内淳一家につたえられた膨大な文書を整理・解説したのが「堀内文書」である。当時の小川鼎三日本医史学会理事長を中心にして文部省科学研究費による「江戸時代後半の蘭方医術の発展に関する研究班」が結成され、この研究班によって解説と内容の検討がおこなわれた。その成果は『日本医史学雑誌』一六巻三号から一二回にわたって連載されていたので、おおくの会員の目にふれたことと思う。

本書においてもこの「堀内文書」を史料として縦横に活用しているが、これにもれたおおくの史料を発掘して追加し、それにもとづいて米沢藩堀内氏代々の医業を克明にえがくことに成功している。

なかでもその主要部分をしめるのは五代素堂堀内忠竜(忠寛)の業績である。素堂は米沢藩における最もすぐれた蘭学者であつた。この藩における蘭学の系譜は堀内氏を中心として興隆したといつても過言ではない。そればかりか西洋小児科医書を最初に和訳した『幼幼精義』の翻訳者であり、歴史に

のこる蘭方医として忘れることのできない存在である。当然のことながらこの素堂の記述は一四〇頁にもおよび、堀内氏の記述の三分の一をしめている。

素堂についてはその孫にあたる堀内亮一氏(淳一氏の祖父)が、昭和七年に『堀内素堂』をあらわしており、本書においてもこれからおおくの文書を引用しており、これらを参考にしている事実がみられるが、あわせて「堀内文書」におさめられた書簡を詳細に引用して素堂の人間像を描くことに力をそそいでいる。今後堀内氏の医の思想と医療を研究するものにとつて、本書と『堀内素堂』の二著は欠くことのできない基本的な文献となるにちがいない。

堀内氏以外の米沢藩医としては、杉田玄白の弟子であり、長崎にも遊学した高橋玄勝、シーボルトの門人であり、明治期の九州帝国大学小児科学教授伊東祐彦や東京帝国大学建築学教授伊東忠太の祖父にあたる伊東祐直、藩の筆頭侍医であり今大路玄朔の門人の有壁道察を祖とする有壁家の系譜をはじめとして、逃亡中の高野長英をかくまったといわれている素堂の門人高橋嘉膳、シーボルト事件に連座して米沢に流され、かの地で没した長崎の人吉雄忠次郎などに言及している。

ほかに米沢藩医学館好生堂についてのくわしい記述がみられる。

著者の家は「代々の医家というわけではなく武士の家柄であつたから、医学関係の古文書などは全くなく、この方面で医学と結びつくものはなかった」とのべて、いかにも医学とは縁が薄いような記述がみられるが、豊富な知識を内に秘めながら隅々にまで神経がゆきとどいた論考は、読むものを史料解読の醍醐味の境地に誘ってくれる。

さきの記述を実証するかのように、著者は北条氏の祖先と明治期を生き抜いた曾祖父の伝記『北条元利の生涯』を昭和四五年に出版し、さらに今年五月にはやはり家の歴史を仔細にたどつて、越後毛利の北条氏の事績をえがいた『北条氏史』を米寿記念として出版している。まさに刮目すべき旺盛な執筆力であり、老いてますます盛んな表現力というべきであろう。さらに著者は半世紀以上にわたつて短歌に親しんでおり、現在は「米沢短歌会」の主宰者として敷島の道にも精進をかさねていることをつけ加えておこう。

最後に望蜀の望みの誇りをまぬがれないかもしれないが、これだけ広範囲にわたる記述をふくみ、地方史が中心とはい

え単に一地方にかぎられない全国的な名声をえた人物をとりあつかった学術書なので、索引が付されていないのはなんとも不便なことであり、残念なことといわなければならぬことをつけくわえたい。

先日著者から、『米沢藩医史私撰』の残部が四〇部ほど手許にのこっているので、医史学会関係者に寄贈したいとお申出をいただいた。ご希望の向きは直接著者にお申し込みいただければ、無料でお送りいただけることになっている。なお申しこみ先は、〒九九二一〇〇五一 米沢市城北一―三一―一五 北条元一氏である。

(深瀬 泰且)

〔米沢市医師会・〒992-0039 米沢市門東町三―三一―一七、一九九二年五月、A五判、六六〇頁、八〇〇〇円〕

訂 正

前号(44巻3号)の四二八頁、国際シンポジウムの記事欄の中に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

上段11行目 誤 共催・講演↓ 正 共催・後援

下段8行目 誤 H. Freeman ↓ 正 H. Freeman